

## ◆石膏解

〔《本経》石膏：味辛微寒。主中風寒熱，心下逆氣驚喘，口乾舌焦，不能息，腹中堅痛，除邪鬼，産乳金瘡〕

石膏は酸素・硫黄を含み〔CaSO<sub>4</sub>・2H<sub>2</sub>O〕，涼でよく散じ透表解肌の効能をもつ。外感実熱には，大胆に使えば金丹にも勝る。《本経》には「微寒」とあって大寒ではなく，また「産乳」によいとあり，薬性は最も純良である。大寒と誤認して石膏を煨用する医者が多いが，宣散の性質が収斂（豆腐製造に加えるにがりには必ず煨用して，収斂の性質を利用する）に変わるので，外感実熱に用いると，痰火を収斂し凝結するので散らせず，1両でも十分に人を傷つけ，金丹変じて鳩毒〔毒鳥である鳩の羽を酒に漬してつくった毒薬〕になる。煨石膏を誤用して失敗すると，俗医はその原因が石膏ではなく煨石膏であることがわからず，逆に「石膏は煨用してもなお人を傷つけるほど猛烈で，煨用しなければなおさらである」と言う。ここに一唱百和〔1人が言うとみな迎合する〕し，ついに石膏を恐れて手を出さなくなり，大胆に用いるものでさえ7～8錢用いるにすぎない。石膏の質は非常に重く7～8錢では一撮みにすぎない。微寒薬の一撮みで寒温証の燎原の熱を撲滅しようとしても，大きな効果を期待できるはずがない。したがって，私は外感実熱に生石膏を用いる場合には，軽証でも必ず1両，実熱熾盛なら4～5両あるいは7～8両の大量を用い，単用したり他薬と同用し，必ず茶碗3～4杯の湯に煎じ4～5回に分けて徐々に温飲させ，熱が退けば全量を飲ませない。このように大量に煎じて徐々に服用させるのは，病人の家族が疑い恐れないようにし，かつ薬力を常に上焦・中焦に作用させ，寒涼が下焦を侵して滑瀉させないためである。外感実熱に石膏を生用しても絶対に人を傷つけることはなく，大胆に用いれば必ず退熱する。ただし，熱実で脈虚の場合は，必ず実熱に虚熱を兼ねるので，白虎加人参湯の方意に倣って人参で石膏を助けると必ず退熱する。なお，薬局にある細かく挽いた石膏は煨いたものが多く，処方中に明確に生石膏と書いても薬局が煨石

膏を出すのは、煨石膏を常備していることと、生石膏に対し慎重になっているからである。したがって、生石膏を用いるときは、石膏の塊を購入し細かく挽く（石質の薬は細かく挽かなければ十分に煎じ出すことができない）のを確かめなければうまくいかない。薬局から購入した石膏が煨なのか生なのかはわかりにくければ、煎じた石膏が薬壺の底に凝結して傾けても出てこなければ必ず煨石膏なので、その薬湯は絶対に服用してはならない。

**【附案】**長男の蔭潮が7歳の時に風寒にかかり、4～5日間全身に高熱、舌苔は黄で黒みを帯びていた。子供は服薬が苦手なので、強いて飲ませると嘔吐が止まらなくなる。そこで、生石膏1両ほどを煎じた上澄みを、3回に分けて温飲させると熱がやや退いた。さらに生石膏2両を煎じて徐々に飲ませると、またやや退いた。そこで生石膏3両を煎じて徐々に温飲させると、すっかり癒えた。7歳の子供に対し約1昼夜に生石膏を合計6両用いたが、病後には食欲が増し、少しも中焦を冷やす弊害はなかった。これでも石膏は大寒なのか、それとも微寒なのか？ これは私が初めて石膏を大量に使用した経験で、初回はたった1両を3回に分けて服用させたのは、まだはっきりと石膏の性質の理解がなかったからである。大量の石膏を大胆に用いることができない人は、私のように次第に増量して石膏の能力を最大限に引き出してはどうだろうか。

同じ村の友人・趙厚庵の60歳近い夫人が温病にかかり、脈は数で洪実、舌苔は黄で乾燥し、薬のにおいを嗅いだだけで嘔吐した。生石膏の細末のみ6両を飯を炊く小鍋で煎じ（煎薬用の容器を用いなかったのは、薬のにおいでまた嘔吐するのを恐れた）、大碗一杯の上澄みを取り、嘔吐しないよう1回に1口だけを温飲させたが、飲み込むと異常に煩躁したので、病人の家族は薬が証に合っていないのではと疑った。私が「そうではない。病が重く薬が軽いからこうなるだけだ」と言って、3回飲ませると煩躁がなくなり、4時間経って薬を飲み終わると治癒した。

同じ村の友人・毛仙閣の三男で32歳になる印棠は、もともと痰飲があり、傷寒証にかかったが服薬調治して治癒した。その後食べすぎて

再発したが、服薬するとまた癒えた。その数日後また食べすぎて再発し、治療しても効かないので、4～5日して私に診察を頼みにきた。脈は洪長有力であったが、舌苔は淡白で燥渴もなく、梨を1口食べてもすぐに寒気が甚だしく、石榴子（ザクロ）1粒を食べても心中に冷えを覚えた。私は捨症従脈〔症状にとらわれず脈象に従う〕し、大剤の白虎湯を用い、もともと痰飲があるので半夏を数錢加えた。すると、その場にあった村のベテラン医師で表兄〔母方など姓が異なる従兄弟〕・高夷清が疑問をもち、「この証は心中に渴も熱もなく、このように寒涼のものをきらうので、私がみるところ清解薬もつかうべきではないと思うが、あなたはなにを根拠に生石膏数両を用いるのか？」と尋ねてきた。私は「脈の洪実は陽明実熱の証拠で、口渴も熱もないのはもともと痰飲があって湿が勝るためである。寒涼のものをきらうのは、胃中の痰飲と外感の熱が互いに膠漆して胃腑に変化を来し、涼を敵とみなすからである」と答えた。仙閣は医学に通暁していたので私の言葉を信用し、2昼夜に10数回服薬させ、生石膏を合計1斤ほど用いると、脈がやっと和平になったので、私は帰宅した。ところが3日後に、再び私に往診を求めてきて、「非常に激しくぶり返して今にも危篤になりそうだ」と言う。そこで「この証は非常にうまく治癒したのに、どうしてそのように再発したのか」と思った。出かけて診ると（3里〔1里は約500メートル〕以上離れている）、痰が非常に多く詰まり、続けざまに咳吐して止まらず、意識が恍惚とし言語が錯乱し身体が震え、脈は平和無病であるが、右の関脈の胃気だけがやや弱い。私ははっと悟り、急いで「この証は間違いなく以前に食べすぎて再発したので、今回は飲食を過度に警戒して再発したのだ」と家人に言った。果たして病人の家族は前の失敗にこり数日間は極力食べものを少なくしていた。私は「今回は薬はいらない。腹一杯食べればすぐに治る」と言ったが、家人はこのような病状を心配して食べさせることができなかった。私は「心配には及ばない。もし腹が減ったための病気なら、食べものを見れば必ず食べたくなる」と言った。家人は私の言うことを聞き、時はすでに晩の8時であったが、明け方まで

に3回食事をさせ、毎回注意しながら与えたところついに癒えた。

西洋薬のアセトアニリドは退熱氷ともいうが、その解熱作用はじつは石膏にはるかに及ばない。石膏の涼性は水には及ばないが、解熱作用は水より数段優れる。隣村の竜潭庄の70歳過ぎの張老人が、孟夏に温病にかかり、4～5日間煩熱・燥渴した。人をつかって80里〔40キロメートル〕離れたところから氷を運ばせ、日夜思う存分食べたが、煩渴は変わらない。脈は洪滑かつ長、重按有力で、舌苔が白厚で中心が微黄である。白虎加人参湯の生石膏を大量4両にし、大碗1杯に煎じ数回に分けて温飲させ、2剤を続けると煩熱・燥渴は消失した。

また、瀋陽県長官・朱靄亭の50歳過ぎになる夫人が、戊午〔1918年〕の季秋〔陰暦9月〕に重い温病にかかった。まず日本人の医者治療を頼んだところ、服用した薬物はわからないが、氷嚢で熱をさまそうとした。数日の後、熱がますます高くなり、昏々と眠っているようで大声で呼びかけても反応せず、脈は洪実で強い。私は氷嚢を取り除かせ、生石膏細末4両・粳米8錢を煎じて上澄み茶碗4杯を取り、10時間ほどかけて薬をすべて服用させると、豁然と意識が戻った。靄亭は非常に喜び、子息の良佐に私から医学を学ぶように命じた。

友人の毛仙閣の70歳に近い夫人が、正月中旬に傷寒にかかり無汗であった。本来麻黄湯証であったが、誤って桂枝湯を服用したために汗が出ず、急に上焦の煩熱・悪心が生じ、薬の臭いを嗅いだけで嘔吐し、石膏だけを煮出した上澄みや白湯を飲んでも吐出した。ただ昼夜小さな氷の塊を飲むと吐かずにすんだので、2日間氷を若干飲んだが煩熱は軽減せず、脈は関前が異常に洪滑であった。そこで、新鮮な梨の切片に生石膏細末を付けてよく咀嚼して飲ませたところ、薬を吐かずに受けつけ、2両を飲み終わると治癒した。

石膏には瘰癧の熱を清する働きもある。奉天〔遼寧省瀋陽の旧称〕の友人・朱貢九の5歳になる子息の文治が、庚申〔1920年〕の立夏過ぎに全身に高熱を發し、きわめて稠密な發疹が生じ、脈が洪数で舌苔が白厚なので、瘰癧を兼ねた疹とわかった。涼薬で清解したかったが、もと

もと心下に痛みがあり、発疹が出てから生鮮果実を貪食して前日も同様の痛みがあったので、あえて重剤を用いず、生石膏・玄参各6錢、薄荷葉・蟬退各1錢、連翹2錢を使用した。夜間服薬させて翌日の午後に診ると、呼吸が非常に粗く鼻翼呼吸で、咽喉が痛み、さらに鼻から少量出血し、強い煩躁不安がある。私はやむを得ず生石膏を大量3兩用い、玄参・麦門冬（帶心）各6錢に少量の薄荷葉・連翹を佐薬とし、茶碗3杯の煎湯を3回に分けて温飲させた。翌日診ると諸症状はすべて軽減したが、余熱がなお熾<sup>さか</sup>んで、大便は1度あったがまだ燥糞で、心中が熱く、脈は相変わらず有力である。そこで涼解薬中に生石膏1兩を加え、2剤連服させると壮熱がようやく退き、続けて涼潤清毒の剤で調治するとすっかり癒えた。

石膏には咽喉の熱を清する働きもある。滄州〔山東省滄州市〕の友人・董寿山が30歳余りの時に、初めて発頤<sup>はつい</sup>〔汗毒ともいい、化膿性耳下腺炎に相当する〕に罹患し、数日すると下顎から頸項部すべてが腫れ、前胸部まで波及して次第に腫脹し下行してきた。牙関緊急があり、なんとか歯の隙間から薄いスプを入れたが、咽喉が腫れて痛むので飲み込みにくい。医者に治療を頼み、清火解毒薬を数剤服用すると、腫れと熱は逆に増悪した。ちょうど中秋節の後で淋雨が続けていたが、病勢が差し迫っていたので、雨を冒して30里〔15キロメートル〕の道を、車を駆って私を迎えに来た。診ると下顎から項まで異常に腫れあがり、病状は時毒〔季節的に流行する疫病〕に類し（瘡家に時毒証がある）、触ると硬くて熱をもち色は真っ赤で、これ自体が火毒の気の塊であった。下方の腫れはすでに心口〔みぞおち〕に至り、歯の隙間から水を半口ほど入れると、必ず手で口を覆って努力の末にやっと飲み込めた。また、痰が胸中に壅滞して咽喉まで詰まって、水を受け入れる余地がなく、水を少し入れると必ず代わりに痰を1口吐出した。さらに、気が下から上衝する感じで、時に吃逆が止まらず、脈は洪滑かつ長で重按すると有力で数を兼ねていた。「これは俗にいう蝦蟇<sup>がまうん</sup>瘡で、毒熱が熾盛で陽明の腑に盤踞している。燎原の火のようなものなので、必ず大量の生石膏で清す

るべきで、そうすれば毒熱の勢いは緩和する」と私が言うと、その場にいた従前の医者が「これまでに生石膏を1両用いたが、まったく効かなかった」と言った。私は「石膏は微寒の薬であると《本経》に明確に記されている。このような熱毒にわずか1両ぐらい用いても効果はない」と言い、生石膏4両・金縷重楼（黄色く味が甘で辣味のないものを用い、なければ使用しなくてもよい）・清半夏各3錢，連翹・蟬退各1錢（咽喉の腫脹が強いので，表散薬はあえて多用しない）を煎じて服用させたが，薬が胸間に停滞して下りていかず，熱と腫れがますます増悪するようであった。そこで，本証は結胸を兼ねており，火熱に下行の路がないためにますます上衝するとわかった。幸いにその村には薬局があり，急いで生石膏4両・生代赭石3両を取り寄せ，また煎湯を徐々に温飲させたが，やはり胸間に停滞する。さらに生代赭石3両・栝楼仁2両・芒硝8錢を急いで取り寄せ，また煎じて飲ませたが胸間はやはり開通しない。この時になると咽喉がますます腫れ，水を飲んでも下りなくなり，病人の家族は恐れおののいてどうしようもなくなった。私はよくわかるように，「私が急いで次々に薬を用いた理由は，腫勢が徐々に増しているのので，急がなければ薬を飲めなくなることを恐れたからである。今，胸中にはすでに多くの薬が溜まっているので，断じて下行しないはずはない。薬が下行すれば結が開いて便が通じ，毒火がこれによって下降するので，上焦の腫れと熱は必ず退く」と説明した。その時は夜10時であったが，夜半に薬力が下行し，黎明に燥糞数個を下し，上焦の腫れと熱が軽くなり，水分を摂れた。朝食時には口が少し開くようになり，茶を1碗服用した。午後になると腫れと熱がまた次第に増し，胸に触れると焼けるように熱く，脈はなお洪実である。これは燥結がまだ出尽くしていないことを意味するので，大黄6錢・芒硝5錢を服用させると，燥糞とともに溏便を下し，病状は好転した。しかし腫れたところの硬い部分にはあまり変化がなく，胸間に触れるとやはり熱く，脈象にもまだ余熱があるので，また生石膏3両と金銀花・連翹各数錢を大碗1杯に煎じて数回に分けて温飲させ，日に1剤を服用させると，3日で完治した（本証では2

回目大黄・芒硝を加えるべきであった)。

石膏には頭部顔面の熱を清する作用もある。私が德州〔山東省徳州市〕にいたころ〔辛亥革命後、德州駐屯軍の招聘をうけて軍医正として任官していた〕、20歳余りの軍人が温疫にかかり、3～4日間で頭部顔面が悉く腫れ、腫れたところの皮内には黄色い液が溜まり、破れて潰瘍糜爛になり、身体に時に斑点が現れた。人から「この証は大頭瘟だいずうんといい、潰瘍糜爛の状態は瓜瓢瘟かじょううんにも似て最も治りがたい」と言われ、すっかり怖くなって診察を求めてきた。脈は洪滑かつ長、舌苔は白微黄、心中に煩熱があり冷たいものを食べたいという。そこでわかりやすく「この証は難治ではない。頭部顔面の腫れと糜爛や全身の斑点は、熱毒が胃に入り胃気によって体表に現れたものに間違いないので、大量の生石膏を服用すれば治る」と説明し、青孟湯（周囲に縁がある荷葉1個・生石膏1両・羚羊角2銭・知母6銭・蟬退3銭・白僵蚕2銭・金綫重楼2銭・粉甘草1.5銭）を用いた。方中の石膏を3両に知母を8銭に増量し、大碗1杯の煎汁を数回に分けて温飲させると、1剤で症状の大半が消退し、翌日方中の荷葉・蟬退を除いて1剤を服用させると、すっかり癒えた。

外感の痰喘には、《金匱》小青竜加石膏湯がよい。ただし、外感の熱がすでに陽明の腑に入れば、小青竜湯中の麻黄・桂枝・乾姜・細辛の諸薬はじつは用いないほうがよい。かつて治療した奉天の同善堂孤児院の8歳になる劉小四は、孟秋〔陰暦7月〕に温病にかかり、10数日治療を受けたがますます増悪した。表裏ともに大熱があって呼吸が促迫していたが、脈は洪数で重按有力で、まだ治せると判断した。大便が2日間ないというので、大剤の白虎湯を用い、石膏を大量の2両半にし粳米に代えて生山薬1両を使用し、喘息促迫があり肺中に邪が伏しているのを、薄荷葉1銭半を加えてこれを清した。茶碗2杯に煎じた湯を2回で温飲させると、1剤で大半が癒え、また1剤を服用させると全治した。

また邑〔村〕の北境の于常庄の40歳余りになる于某は、風寒外束で汗が出ず、胸中に煩熱があって呼吸が促迫したので、医者が蘇子降気湯に散風清火の薬物を加えて治療すると、数剤でますます悪化した。脈は

洪滑で浮であり、私が創製した寒解湯（生石膏1両・知母8銭・連翹・蟬退各1.5銭）を投じると、間もなく上半身に汗が出て、またしばらくすると薬力が下行するのがわかり、下焦と下肢にも汗が出て症状は消失した。

生石膏は外感実熱には、まことに2つとない良薬である。時には大量の石膏だけでは効果がなく、白虎加人参湯の方意に倣<sup>なら</sup>い人参で石膏を助けてはじめて退熱の効果を強力に現す。以下に数例を詳しく記載して参考に供する。

傷寒の定石として、汗・吐・下の後に白虎湯を用いるときには人参を加え、口渴があるものに白虎湯を用いる場合にも人参を加える。私の臨床経験から、50歳を過ぎていたり、壮年でも精神的・肉体的な過労があったり、もともと内傷病があったり、先天的に虚弱な場合には、汗・吐・下の後ではなく口渴がなくても、白虎湯を用いるときにはすべて人参を加えるべきである。かつて治療した邑の城西にある傅家庄の20歳になる傅寿朋は、身体がもともと弱く、たまたま気分がすっきりしなかった。医者が三棱・延胡索などの破気薬を用いたが、短気〔息切れ〕を自覚したのですぐに薬を止め、あえて服用しなかった。2日経つと急に呼吸困難が生じ、筋肉がピクピクと震え意識が朦朧となった。脈は数で6至、浮分は揺揺として按じると触れない。肌膚は非常に熱く、上半身に時に熱い汗が出て、「心に熱が迫って強い動悸がする」と言う。舌上にはわずかに白苔があり、中心は黄色味を帯びる。この病変の経過を総合的にみると、1日のうちに急に発症しているが、外感を受けたのはその日ではない。気分がすっきりしなかったときに外感を受けたが初めに自覚がなかっただけである。動悸が非常に甚だしく、薬を取りに行く暇がなく、急いで生鶏子黄4個をぬるい湯とかき混ぜ、その碗を湯の入った盆中に置き温まるのを待って服用させると、呼吸困難はすぐにおさまり動悸も消えた。続けて大剤の白虎加人参湯を用い生石膏3両・人参6銭とし、さらに方中の粳米を生山薬に代え、大碗1杯に煎じ生鶏子黄3個を入れて混ぜ、徐々に温飲させると1剤を飲み終えて治癒した。

邑の北六間房の17歳になる王姓の少年が、孟夏〔陰暦4月〕に温病にかかり、8～9日間呼吸が促迫し、しきりに咳をして血の混じった痰を吐いた。咳吐すると痛みが胸肋にひびき、上焦に微かに苦悶感を伴った。脈を診ると確かに実熱で、7至になる数（白虎湯を用いる場合、脈が7至から6至強なら人参を加えるべきである）で揺揺として無根である。もともと虚弱なうえに読書して頭を使いすぎ、受けた外感も甚だ強かったために、脈証がこのように危険になった。胸肋が痛み苦悶して咯血するので、私が創製した白虎加人参以山薬代粳米湯を用いたが、あえて人参は多用しなかった。生石膏3両・人参3錢とし、さらに竹筴・三七（細かく搗いて冲服）各2錢を加え、大碗1杯に煎じて徐々に温飲させると、1剤で血が止まり、症状も改善した。さらに1剤を服用させるとすっかり癒えた。三七を用いたのは、吐血だけでなく胸脇の痛みも治すためである。

寒温証〔外感熱病〕では、舌の乾燥を最も忌み、舌苔が薄くて乾燥していたり、乾燥かつ収縮があるのは、最も危険な証である。しかしその原因は多様で、真陰虧損によるもの・気虚で上潮しないもの・気虚でさらに下陷するものなどがあるが、すべて白虎加人参湯が有効で、さらに方中の粳米を山薬に代えれば、必ず奏効する。人参は強力に補気し、元気を旺んにして上昇させるので下陷の恐れがなくなる。また、石膏と同用すれば、外感における真陰虧損を大いに補い、濡潤の山薬・知母の配合があるのでなおさらである。脈が虚数の場合は、人参を多用すると同時に滋陰の玄参・生地黄を加え、茶碗4～5杯に煎じて徐々に温飲させる。1度に1口ずつ飲ませると、寒涼薬が下焦を侵して大便が滑瀉するのを防ぐとともに、薬力が息々と上達して元気を上昇させ津液を生じる。1剤を服し終わればさらに1剤を煎じて薬力を昼夜継続させれば、数日で火が消退し舌が潤って治癒する。かつて治療した隣村の13歳になる劉姓の少年は、孟冬〔陰暦10月〕に傷寒証になって7～8日経ち、呼吸が促迫して鼻翼呼吸し、意識が昏愼して時に譫語し、言うことは仕事のことばかりであった。脈は微細かつ数で無力。舌は乾いて縮み外に伸

び、口を開けさせて診ると舌の表面には黒色の癍点があり、苔のようで苔ではなく、しきりに涼水を飲むが舌にはまったく潤いがない。私は「この病気は必ず力を使いすぎたので、胸中の大気が下陥して津液が上潮せず、また気が下陥し火を托して外出できないので、脈道が瘀塞している。そうでなければ、このような脈象で好きなだけ涼水を飲んで滑瀉しないはずがない」と言った。患者の家族は「先生のいわれることはごもつともです。これまで頼んだ医者薬を服用しても少しも効果はありませんが、一体助かる見込みはあるのでしょうか」と言う。「この病には尋常の治療法のように1日1剤だけでは、たとえ証に合っているとしても効果はない。私の用薬の通りにすれば、必ず挽回できます」と答え、生石膏4両・党参・知母・生山薬各1両・甘草2銭を、大碗1杯に煎じて徐々に温飲させ、1昼夜に続けて2剤服用させると、病はついに癒えた。

張仲景は傷寒で脈が結代するものに炙甘草湯を用いるが、まことによい方剤である。私は寒温証の治療では、外感の熱が盛んでなく脈に結代があれば、張仲景の方法を遵守する。ただし、脈に結代があっても外感の熱が盛実なら、白虎加人参湯にすべきで、粳米を山薬にし知母を生地黄に代えるとさらによい。症例は人参解中に詳しいので、参考にされたい。

従来から産後の証には最も寒涼を忌むが、産後の温病で心中燥熱し、舌苔が黄厚で、脈が洪実ならば、寒涼を忌む必要はない。ただし、使用する寒涼の薬物は、慎重に選び適量にすべきで、漫然と投じてはならない。産後の温病の軽症は、熱が陽明の腑に入っているても脈があまり洪実でなければ、玄参を大量1両ないし2両用いると必ず効果がある。温病の重症には、必ず白虎加人参湯でなければ退熱しない。なお、粳米を生山薬に、知母を玄参に代えて、はじめて穏当になる。処方編中の白虎加人参以山薬代粳米湯中に症例があるので、参考にされたい。《本経》では、石膏・玄参は「産乳を治す」と明確に記載があるが、知母にはその記載がないからであり、あえて師心自用〔自説に固執すること〕するのではない。

鉄嶺の友人・呉瑞五は医学に通じ、《医学衷中参西録》の諸方を篤信